

浮舟に焦点を当てて」というところを根幹に据えて「総角」「浮舟」「夢の浮橋」などの巻々を読んでいた。

以上のような巻々の選定以外にも、いわゆる玉蔓系列の巻々や、六条御息所まつわる「葵」（車争ひ）や「賢木」（野宮の一夜）など有名な場面を読んでいくという選び方もあるだろうが、自分としては大河小説的な大きな流れの中で、光源氏の生涯から一群の人々の在り様を追っていったほうが、一年間を通した授業としては生徒を飽きさせずに引く張っていただけるのではないかと思いい、このような選定を行った。

また、これら授業内容を補うものとして、生徒自身に任意の巻を選ばせて「源氏物語新聞」なるものを各学期に最低一部発行するよう課したことや、定期試験ごとに授業で扱った内容に関わる論文資料を読み込ませ、それらに関する論述問題を課したこと、さらに定期試験に加えて我が校特有の夏休み明けにある進路を決定する重要な試験を利用して、夏休み中に「若菜 上 下」巻を読破させたことなどが、『源氏物語』に対する読みを深められたように思う。

三、「純愛物語」としての「桐壺」の巻

生徒たちにアンケートをとってみると、一様に面白かったと答える巻としては、「桐壺」冒頭と、「若菜 上」女三

宮の降嫁、「御法」萩の上露、あたりが上位を占める。中でも更衣の死が迫った際に、桐壺帝が取り乱し、帝という立場をかなぐり捨ててまでも、更衣の死を看取ろうとする姿に生徒達は共感を覚えるようである。

しかし、この帝の行為の元をたどれば、摂関政治体制から解き放たれた理想的な天皇による親政を復活させるため、あえてこのような身分の低い女性を選んだとも言える。また、更衣の側としても、明石の一族につながっていく父大納言家の期待を一心に受けて入内してきた女性という意味で、この二人の恋愛を純粋な意味での純愛と呼べるかということには疑問が残るが、生徒達の認識レベルにおいては、身分や立場などもなげうった激しい純愛と映るようである。したがって、自分はそういった生徒達の共感レベルに沿いながら授業を進めていった。

四、「桐壺」冒頭の押さえるところ

恋愛が政治であった時代、「いづれの御時にか」に始まる冒頭の一文は、当時の読者にとっては強烈なインパクトをもっていた。それはなぜだろうという問いかけから始め、この一文には当時の摂関政治体制に対する反逆のメッセー

ジがこめられていたということを、まず歴史的背景から理解させた。この冒頭の一文のメッセージ性を理解するや、早くも生徒達は物語世界に引き込まれていくようである。

次に、絶対的な身分社会である当時の宮廷がイメージできない生徒には「同じほど、それより下らふの更衣たちは、ましてやすからず」のくだりがなかなか理解できない。そこで現代においても身分制度が色濃く残っている社会として、相撲部屋の例を挙げて説明した。例えば、親方から特別に目をかけてもらっている下っ端の幕下力士がいたとする。横綱、大関クラスの力士たちは、面白くないとは思っているものの、自分の身分は安泰なのであまり嫉妬もしないが、同じレベルで頑張っている力士や、はい上がっていくしかないそれより下の力士たちの嫉妬が強くなるのは想像に難くない。こういった説明でやっと生徒達はこの表現が腑に落ちるようであった。さらに、帝の恋愛、そして世継ぎの誕生が次の世を占い、様々な階級の人々の思いと結びついていた時代、そうした宮廷の波紋は、宮廷内にとどまらず、一般民衆にもまたたくまに拡がっていく。こうした場面では現代における「雅子様懷妊報道」や「愛子様フィーバー」の過熱報道ぶりを例として挙げ、当時の人々の混乱ぶりをイメージさせた。そしてその不安が現実のものとなり「男皇子さへ生まれたまひぬ」に何気なく使われている添加の副助詞「さへ」に込められた深い意味なども併せて読み取

らせた。以下、帝の第二皇子に対する寵愛ぶりや、それがまた新たに生み出す波紋、ヒートアップしていく更衣に対する嫌がらせを帝が庇うことによつてさらにまた恨みを買ってしまうという悪循環は「なかなかかなり」という形容動詞をキーワードに読み解いていった。

そしていよいよ生徒たちが最も魅かれる更衣の死の場面に入っていく。更衣が病に伏して後もなかなか退出の許しを出せない帝。そしていざ退出させる段になり、更衣という身分に対するもてなしとしては破格の車を用意させてまでも、なお未練がましく泣きついて、退出させられない帝の描写に、男である生徒たちは自分を重ね合わせ引き込まれていく。ここでは、男としての帝が「後れ先立たじ」つまり「死ぬときは一緒だ」と、「死」に重心を置いて更衣に泣きすがるのに対し、女である更衣は「いかまほしきは命なりけり」と最後まで「生」に重心を置いている点に注目させた。そして最期の言葉となった「いとかく思ひたまへましかば」で、反実仮想の「ましかば…まし」を教えつつ、その省略されている部分で更衣は何を伝えたかったのかを考えさせた。「こんなことになるならば、愛されない方がよかった」と答える生徒が多かったが、「女もいといみじと見たてまつりて」という表現や、辞世の句の内容から判断してこの場にそういう解釈はふさわしくないのでは、という意見も多かった。また、「もつと皇子のことを頼んでおけば

よかった」など皇子の将来を心配するという意見もあったが、それもこの切羽詰った場面では打算的すぎるという意見もあり、ここは答えを限定せず、そのように思う根拠を述べさせるにとどめた。

また、更衣の呼称が、皇子を産んだ母親としての敬称である「御息所」から、そうした身分も何も取つ払った一人の人間としての「女」という呼称に変わっている点にも注目させた。そしてその「女」の最期の言葉を聞いた時「ともかくもならむを御覧じはてむ」と帝は決心する。この決断がどれほど重たいものかを、「あるまじき恥もこそ」の「もこそ」や「限りあれば」の「限り」などをもう一度想起させて理解させた。この帝という立場をも無視して、最愛の女性の最期を看取ろうとする一介の「男」としての思いに生徒たちは「純愛」を読み取るようである。しかしまた一方で、純粋に愛するという行為こそが、更衣を死に追いやってしまったという側面も捉えなおす必要があるだろう。こうした問題を投げかけながらこの「桐壺」の巻を読み終えた時、真の意味で「愛する」ということはどういうことなのかを生徒たちは考えざるを得ない。すると、授業を終えて、ある生徒が質問にきた。

「先生、自分は彼女に対して、どれだけ彼女のことを思っているかということ伝えることだけが愛情だとはかり思っていたけど、彼女にとってはそれが必ずしも幸せでない場

合もあるんだね。ところで、更衣は最後に何を帝に伝えたかったんだろう？ 前の和歌から判断すると、自分はどうしても、女の側からも積極的に愛したかった、そして愛し合いながらもつと一緒生きていたかったのに……と思っていたような気がしてならないんだけど、こういう解釈は間違っているでしょうか？」

この質問に対してはそういうことも十分に考えられるのではないかと生徒には伝えたが、こうした質問ができたこと自体にこの「桐壺」巻冒頭場面を読む意義があったと考える。

また一方で『源氏物語』が生徒を惹き付ける要素は、高麗の相人から予言を受け、臣籍に降ろされた光源氏が義理の母親である藤壺を慕い、不義密通を犯してしまうという荒唐無稽なストーリー展開にある。このストーリー展開の起点であり、根幹にあたる「高麗人の観相」の場面や、「藤壺思慕」の場面を取り上げてくれる古典の教科書が、その後の展開を把握させる上でとても扱いやすい教科書といえるだろう。